「南無阿弥陀仏が苦手」

清見組　満成寺　夏野　晃遵

私が生まれた満成寺は、高山市の田舎にあるお寺です。門徒数が五十件もない小さなお寺です。でも、月に一回のお参りの日は多くの人が来て「南無阿弥陀仏」と唱えています。しかし私は、「南無阿弥陀仏」と唱える姿を見て不思議に思っていました。自分にとっての南無阿弥陀仏の意味を考えたことが無かったからです。その根本にあるのは、「なぜ自分は念仏を素直に唱えられないのか」それは、「南無阿弥陀仏」を唱える原動力が私にはないからだと考えていました。「南無阿弥陀仏を唱えるってどういうことなのだろう」という疑問をもったまま、私の父が去年の 7 月に亡くなり、私と母と、そして門徒さんとでお寺を護持していくこととなりました。その中で、父の葬儀と門徒さんの葬儀を通して南無阿弥陀仏は出会い方ではないかということを考えました。

お別れをする際にその人の姿が見えなくなってしまう。けれども、その人が生きた証がなくなるわけではない。たしかに私のなかには、父と門徒さんとの思い出がありました。それは、言葉であったり、しぐさであったり、さまざまな形でその人がいることに気づかされました。その時に、言葉にできない思いがあります。言い尽くせない感謝の言葉であったり、もっとなにかできたのでないかという思いであったり、この言い表せない言葉の形が南無阿弥陀仏ではないかと考

えました。姿は見えなくても、南無阿弥陀仏を唱えることで私の大切な人たちと出会うことができます。親鸞聖人もこのような歌を詠んだと言われています。

「こいしくば　南無阿弥陀仏と称うべし　われも　六字のうちにこそあれ」と、南無阿弥陀仏は一つの出会いのかたちなのです。